

焼きものの町で

伊藤 範子



思わせた。器は、大きなうぶ声をあげながら誕生した赤子のようで、まさしく生きものに見えた。

焼きものの魅力は、陶土の個性を手でまさぐりながら、土と人が一体となったとき、釉(うわすり)や微妙な炎の加減で、柔らかな光と色調を醸し出し、えもいわれぬ美しさを見せてくれるところにあるという。

その日——わたしが、二作目の花びんを製作した日——長い歳月をただひたすら、本物の焼きものを求め続けている土の芸術家の姿に触れ、なにか教育の本質に迫る貴重な示唆を与えられたような気がした。

教育の営みは、芸術とよく似ている。芸術家が作品を創造するように、教師は、ひとをつくりあげていく。子どもの個性をまさぐりながら、彼らと一体となったとき、すばらしいひとを創造することができるとは違いない。

思うに、長年国語教育に携わりながら、これまで、これがオールマイティだといえる指導の方式はついで見つからなかつた。いみじくも、土の芸術家が、土に習ったように、この命題は、目の前にいる子どもにも習うことによつてしか解決できないのかも知れない。

真の教育とは、奇をてらつたり、新しいことを追つたりすることではなく、子どもと一体となつて、あたりまえのことをあたりまえにやる地味な営みである。つまり、その一つ一つに心を砕

いていく丁寧さと、一人一人に手の届く温かさがあるかどうか——あの器を生み出すときの姿なのだ。

それをつくり出すために、わたしたち教師は、毎時間を「わかる授業」の創造と子どもに対する誠実さ、彼らに習う謙虚さを忘れてはならないだろう。また、子どもを変えるには、自分自身の変革に努力しなければならぬし、生徒一人一人の長所や可能性の発見に努め、長い目で見続ける心のゆとりを持たなければならぬだろう。

ある日の授業で

青田 誠

「君たちのからだの値段はいくらだろうね」という私の問いに「？」と大部分の生徒。「人の命は地球より重いといえますよ」とは機転が利く生徒。

「すまん、すまん。質問が悪かつたね。つまり先生の意図するところは、からだを物質として考えた場合の値段です。人間からだは大部分が水素・酸素そして炭素などの集合体です。その他にもいろいろの原子がありますが、多くは今話した原子がかなりの部分を占めていると思つてまちがいありません。ですから、からだの値段は数千円くら

いのものだと思います」「へえーそんなものなのかなあ」と多くの生徒はあらためて自分のからだや友だちのからだをながめています。

「今値段の話をしました、人間の生命体としての寿命を考えてみましょう」「先生、人間はどんなに長く生きても百年くらいのもんですか」「そうですね。そんなものですね。ところで、見方を変えてみよう。つまりね、からだは百年たてばなくなつてしまふけど、からだを構成している原子までなくな



(本郷町立本郷中学校教諭)

わたしがこの町で得たものは、長年培われてきた本郷焼の伝統の技と、陶芸のすばらしさである。そして、厳しい教職の道標とその生きがいである。

※陶芸教室の作品は、次年度のせと市に協賛し、生徒会役員の手で販売され、製作費用・活動資金にあてられる。

